

白いシカ



ケート・セレディ作 瀬田貞二訳

岩波書店

白いシカ

ケート・セレディ作・絵
瀬田貞二訳



岩
波
書
店

930 セレディ, ケート

白 い シ カ

ケート・セレディ作 瀬田貞二訳

岩波書店 1968

146p 23cm (岩波おはなしの本) 小学2〜4年

(参考) Seredy, Kate : The White Stag, 1937.

岩波おはなしの本

■ 白 い シ カ

定価五〇〇円

一九六八年七月十九日 第一刷発行 ©

訳 者 瀬田貞二

発行者 東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三

岩波雄二郎

印刷者 長野市中御所二ノ三〇 田中忠

発行所 東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三

株式会社岩波書店

本文印刷 大日本法令印刷株式会社

製本 株式会社松岳社

表紙・箱・口絵・見返印刷 錦印刷株式会社



もくじ

はじめに 7

一のまき 強い狩人^{つよかりうと}ニムロード 11

二のまき ハズールのふたごワシ 41

三のまき 月の白いワシ 65

四のまき アツチラ 99

訳者のことば 141



白いシカ

ケート・セレディ作／瀬田貞二訳





はじめに

ちかごろわたしは、ハンガリーの歴史をかいだ、つい最近の本をよんでみました。それは、この二十世紀の本の見本のようなもので、どのページも、事実、事実と、事実ばかりがぎりもなくつらなり、学のある歴史家のまくしたてる知識で、こちちにかたまり、理路せいぜんとして、反論のすきのないものでした。

そのページをめくりながら、わたしは、まるで二十世紀のどこにでもある都会のひとつを歩いているような気がしました。ごぼんの目のように町々がきちんと区切ってあって、知識の街燈が白々とかがやき、街路はつるつるのかたい事実の舗装がさ

れています。そんな道では、つまづくこともありますまいし、まようこともありますまい。どの町角にもはつきりと、年月日という道しるべがかかかてあるのですから。

わたしは、その本のある個所に目がひかれました。

「ハンガリー人（マジヤール人）のおこりは、学界論争の的である。その国の言い伝えでは、四世紀にアジアからフン族を出した遊牧民の子孫だとなえている。だが、現在わかっているフン族の歴史とひろがりから考えると、その説はうちけされる線が強い。」

そうかしら？ わたしは本をとじて、目をつぶりました。すると、一つの古い花園がみえました。それは、むかしのフン＝マジヤール族の伝説という、人のかえりみなくなつた大きな花園でした。その木かげの小道はいちめんにこけむして、まがりくねりながら、人目につかない庭の奥へと通じています。そしてそこには、まぼろしのようなふしぎな花々が、異教の神々のくずれた神殿のまわりに咲いています。

それからわたしは、ひとりの少女とそれのおとうさんとが、うねつた小道をしのび歩きしてくるすがたを、みました。ふたりは、白い雄ジカをしたがえて、ブナの木だちのなかで

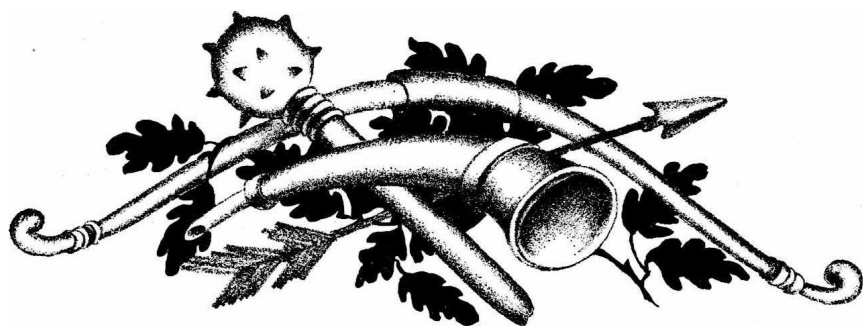
月のおとめたちが花のしとねにおどるさまを、息をこらしてながめたり、部族一の強い狩人ニムロードの墓のまえに、おそれかしこんでじつと立ちつくしたり、フン族とマジヤール族の大神ハズールの、くずれた大きな石の祭壇にぬかずいたりしました。ときどき小道はふいにたえて、とほうもなく大きな木がそこにたおれていて、そのおれた枝々につる草がなん代にもわたってからみついでいました。けれども白い雄ジカがきつとあらわれて、新しい道を教えてくれました。

あの伝説の園は、なんと美しかったことでしょう。その少女は、じつはわたしで、その時みた花園をわたしは、けっして忘れたことがありませんでした。

あれから三十年たったいま、わたしはふたたびたちもどっていきました。でもこんどはひとりであのまがりくねった小道をたどり、ワシのさけびに耳をかたむけたり、勇ましい民族をほめたたえようとして、さまよったのです。運命を信ずるその民族のかたい決心が人びとをみちびいていった土地こそ、いまもその民族の名でよぶ国でした。わたしはたちもどっていきましたが、そしてわたしは、金の糸のまりをもっていって、糸をほぐしながら

ら、伝説でんせつの白い雄おジカのあとを追おつて、ニムロッドの大きな墓はかから、その国くにへ、二つの青い川にはさまれた緑みどりなす平野へいやへ——ハンガリー平野へいやへ、たどつていききました。

嵐あらしとかみなりのなかに異教いぎようの神々かみがみの声をきこうとするかたがた、月光げつこうのなかに妖精ようせいのおどりをみようとするかたがた、信念しんねんが山をうつすことのできることをうたがわなにかたがたは、この本のなかに金きんの糸いとをたどることができましよう。その糸いとは、事実じじつや年月日ねんがつびの重おもさにたえきれないものなのです。



一のまき

強い狩人ニムロード

部族^{ぶぞく}一^{いち}とたたえられた強い狩人^{つよかりうど}、年^{とし}おいたニムロードは、いけにえをささげる石の祭壇^{さいだん}に、ぐったりとよりかかっていた。顔^{かお}には悲^{かな}しみがあり、もりあがったはばのひろい肩^{かた}には、うれいがありました。もたれるからだに祭壇^{さいだん}の石は、ひえびえとこたえました。思^{おも}えば、部族^{ぶぞく}の大神^{おおかみ}ハズールに、最後^{さいご}のいけにえをそなえてから、ずいぶんたくさんの日がたったものです。羊^{ひつじ}と牛^{うし}が、なぞの病^{びょう}気で死^しにましたし、狩^{かり}のえものは、森^のと野原^{はら}からすがたをけしました。祭壇^{さいだん}にそなえるいけにえは、なにもありませんでした。

やがて、ニムロードはうなだれた頭^{あたま}をあげて、あたりをながめ

ました。目は木々のあいだの道をさぐり、耳はどんなかな音さえもききとろうとしました。こそりと動くものありません。しずけさが、重くあたりにたちこめています。そこでニムロードは、ふたたび頭をたれて、じっと動かずに長いこと考えにふけりました。祭壇をめぐるそりたつ、雪をいたいた山々が、とりつくしまのないいかめしさで、ニムロードをみおろしていました。山々は、ニムロードをしていましたし、ニムロードも山々をしていました。ニムロードは、これまで一生、山々の木だちのしげみで狩をしてきたのです。ニムロードは、この山々のかたに、さらに峰々をつらねて、けわしく、寒く、ふみこえがたい、おそろしい山々がとおくまでむらがっていることを、しっています。そしてニムロードは、いま思っておこしていました——部族の人びとをひきいて、いつも東から西へ日のおいながら、あの山々のつらなりをこえてきた、努力と苦しみの年月を。またそれよりまえのこと、大族長クーシユのむすこで、若く強く、むこうみずだった、しあわせなころまでも思いました。そのころ人間はみな兄弟で、おなじことばを話していました。そしてむなしいうぬぼれにかられて、天にとどかせようと思いたつ



て、バベルの塔をきずきました。ついに、おそろしい日がきて、人間のおろかないとなみに、ばつがくだりました。その日、兄弟だった人びとは、たがいのことばがわからなくなり、ものすごい嵐がおそってきて、風にちる枯れ葉のように、人間をあまねく地上に吹きちらしてしまいました。

嵐のあとで、ニムロードとその部族のわずかな人びとは、みしらぬ土地にいることに気づきました。寒くて、岩ばかりで、なにも生えない土地でした。長い長いあいだ、ニムロードたちは、寒さと飢えに苦しみました。ある日ニムロードは、かみなりのとどろきをふたたび神の声としてききとり、おつげのわかる力をさずけられました。そしてその日からニムロードは、じぶんのしなければならぬことをさとしたのです。

どこかに、一つの土地があるはずだ。そこは、魚おどる二つの川のあいだに緑の野がひらけ、狩のえものがむらがついて、あたりは山々にかこまれ、あたたかい日にぬくまった寒さしらずの土地だ。もしじぶんが、部族の者たちをまちがえずに導いて、日ごとに東から西へと日のあとを追って、約束の土地にいくことができたなら、そここそ部族のくに